

## 村上春樹と架空の作家ハートフィールド

平野 芳信

山口大学人文学部名誉教授

山口大学人文学部 異文化交流研究施設第37回講演会

2020年12月20日

### I

『風の歌を聴け』は、いうまでもなく1979年（昭和54年）に村上春樹が群像新人文学賞を受賞することで文壇にデビューする契機になった作品ですが、実に複雑怪奇な小説であります。おそらくは、一度は初めから終わりに向かって直線的に書かれた、あるいは書こうとされながら、バラバラの断片に裁断され、アトランダムにばら撒かれたかのように並び直されたと思われるのです。

その謎は私なりに30年前に「風の風景、あるいはもう一つの物語—『風の歌を聴け』論—」という論文で考察したつもりですが、その時から、この物語の額縁（フレーム）ともいべき〈はじめ〉と〈おわり〉に登場してくるデレク・ハートフィールドなるアメリカ人作家の存在が、それこそ喉に刺さった魚の骨のように、私の心のある部分を領しておりました。

今、額縁という表現を致しましたが、通常我々は、絵画の展覧会である名画を鑑賞したとして、その絵画がどのような額縁の中に収められていたかという点については、記憶が曖昧、ないしは全く忘れていないのでしょうか。しかし、名画は確実に中身に見合う額縁に収められているのです。同様に、読み終わったあとは忘却されてしまうフレームに、春樹はかなりの意匠を施しております。

殊に『風の歌を聴け』の単行本の「あとがき」に当たる部分でも、ハートフィールドの存在を諷するかなのような言辞を弄したために、図書館にデレク・ハートフィールドというアメリカ人作家の評伝や作品を読みたいという依頼が舞い込むという事態が起ってしまった。

現実には、このデレク・ハートフィールドなるアメリカ人作家は存在しませんし、そのモデルについても、すでに例えば畑中佳樹氏が自殺することを含めた経歴の一致によって「英雄コナン」シリーズで有名なロバート・E・ハワードではないかと推定し、さらに、久居つばき・くわ正人コンビによって、作中に架空の書籍からの引用がある点から、ロバート・E・ラブクラフトの可能性もあるのではないかということが定説化されています。

このような事態は、文壇及び出版業界においては「あとがき」で嘘をつくような人を食った真似をする生意気な新人というレッテル（不幸なボタンのかけちがえ）を貼られることになってしまったと想像されます。

なぜなら、春樹自身が「ある長編小説を書いていたときのことで、僕は原稿の段階で、あまり「合わない」編集者から指摘があった箇所をすべて書き直しました。ただし大半は、その人の助言とは真逆の方向に書き直しました。」と回想していますが、これなどは日本の文壇および出版業界と春樹の軋轢を端的に示していると思われるからです。

## II

ところで、興味深いことに、春樹は外国ではいわば正反対の対応をしていたことが辛島デイビット氏の著書『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』（2018年9月 みすず書房）等で明らかになっています。

例えば、村上春樹の英語圏での評価が定まる前の一九九〇年代後半までにバーンバウムとルービンが訳した作品を客観的に見ると、どちらも（様々な事情があり）一般的な「翻訳」作業を超えた「編集」や「翻案」作業を要したものが多い。（略）

村上も翻訳家が必要と考えた「改変」については大らかな方で、基本的には、訳者を信頼し、できるだけまかせるというスタンスを——この方針も英語圏での読者が広がるにつれて徐々に変わることになるが——少なくとも英訳が出始めてからの十年強はとっていた。

いわば、彼の日本と西欧の受容のされ方は、いわばメビウスの輪のようにねじれていたと感ずるのです。この種のねじれ現象は春樹自身が語る文壇デビューに際しての、一種の自己神話（劇）化にも看取できると思われまます。

その自己劇化とは、アメリカ文学に親しんでいた一人の青年がかつてアメリカ進駐軍に接収されていた明治神宮球場で、アメリカ人選手が放ったヒットの快音を耳にして、小説を書こうと思いついたということなのです。しかも、一番新しい回想では、その啓示のごとき出来事を、英語のエピフアニー（epiphany）と言い換えているのです。おまけに、その後、どうしてもうまく小説が書けないので、オリベッティの英文タイプライターを持ち出し、まず英語で書いてみて、それを日本語に翻訳することで、『風の歌を聴け』を完成することができたというのです。

この一連の展開をあたかも敷衍するかのように、佐々木敦<sup>あつし</sup>氏は『ニッポンの文学』（2016年2月講談社）の中で、次のように評しています。

いふなれば村上春樹は、日本語で書く英語作家であり、海の向こうでは英語で読まれる日本語作家です。（略）彼は小説家になるために自分の書いた英語を日本語に「翻訳」しなければなりませんでしたが、そうして書かれた日本語を再び英語に「翻訳」したものを、日本語を解さない世界の多くの読者が「村上春樹の文学」として読んでることになります（つまりこれは日本における海外文学の扱いと同じです）。（傍点原文）

このなんとも奇妙な捻れ（あえて、メビウスの輪に喩えましたが）を含んだ村上春樹という作家を形作っている創作のシステムが、デビュー作『風の歌を聴け』で架空のアメリカ人作家デレク・ハートフィールドを捏造したシステムにも、適用できるとしたら、そこには一体どのような秘密があるのでしょうか？

### III

「文藝春秋」2019年6月号に発表された村上春樹のエッセイ「猫を棄てる」は、それまでの禁をやぶるかのように、身内についての数々の情報をさらけ出した（としか思えぬ）は、私のような村上春樹研究の末席に連なる者にとっても、何か一言でも反応せねばならぬと思わせる記述に満ちあふれています。

それにしても、いったい何から手をつけてたらよいものか？ それほどの膨大な情報開示量なのです。まず、このエッセイは「父親について語るときに僕の語ること」というサブタイトルがつけられています。分量的にも、春樹の父千秋氏の事績と春樹自身との関わりにまつわる内容が半分以上を占めているのです。

昨今、バイプレーヤが注目されておりますが、このエッセイでもバイプレーヤーである母と祖父はいぶし銀のごとく、その存在感を遺憾なく発揮しているように思えるのです。

というより、予てより私の関心は春樹の祖父にあったことを白状しておかねばなりません。その端緒は、芳川泰久氏による次のような一文に接したからなのです。

こうした彼〔引用者注一春樹〕の集中力は、父方の祖父ゆずりで、この祖父は、京都の寺の僧侶だった。その熱をおびた晴朗さは、いつまでも作家の心に刻まれている。この人物には、しかしたった一つだけ欠点があった。酒好きだったのだ。ある晩、酔って、彼の祖父は線路の上に横向きに寝てしまった。その上を路面電車が通った。祖父はふたつに切断されて死んだ。ハルキ・ムラカミの主人公たちがいつもその片割れを探しているのは、そのためだろうか。（『村上春樹とハルキムラカミ精神分析する作家一』2010年4月 ミネルヴァ書房）

実は平成が残り一月余りとなった31年3月末の数日間、私は京都におりました。それは、春樹の祖父の死亡記事を探し出すためでした。いや、誤解を招くことを避けるために、より正確に申しますと、祖父の名前を確認するために記事を探したかったのであって、決して死因が知りたかったわけではありません。

上記の記述から推して、春樹には祖父の記憶があると思われました。それゆえ、私は春樹が1949年生まれであることを考慮し、記憶が定着する時期が生後4、5歳以降であると考え、昭和30年前後の京都新聞を調査の対象とし、京都に赴いたわけであります。しかし、結果は不首尾におわってしまいました。

### IV

ところが、それから、二月も経たぬ間に、春樹が祖父の名が「村上<sup>べんしき</sup>弁識」であることを開示してくれたのです。まさに私の現役最後の年に、一番の肝とでもいべき情報を村上春樹本人がプレゼントしてくれたのです。

いささか長くなりますが、村上<sup>べんしき</sup>弁識氏に関する情報をまとめて引用しておきます。

僕の祖父にあたる村上<sup>べんしき</sup>弁識はもともとは愛知県の農家の息子だったが、長男以外の男の子の

ひとつの身の振り方として、近くの寺に修行僧として出された。(略) やがて京都の安養寺に住職として迎えられることになった。(略) どうやらかなり自由闊達なタイプの人物であり、豪快に酒を飲み、また酔っ払うことで名を馳せていたようだ。名前の通り弁も立ち、僧侶としてはそれなりに有能な人であり、人望もあつたらしい。僕の覚えている限りでは、一見して豪放磊落、一種カリスマ的な要素を持ち合わせていた。大きなよくとおる声で話していたことを記憶している。

彼は六人の息子をもうけ(女子は一人もいなかった)、元気よく人生を生きてきたが、1958年8月25日の朝、8時50分頃に京都(御陵)と大津を結ぶ京津線の山田踏切りを横断しようとして、電車にはねられて死んだ。東山区山科北花山山田町(当時の住所)にある警手のいない踏切りだった。ちょうど大きな台風が近畿地方を襲った日で(その日、東海道線も一部不通になった)、激しい雨が降っていて、祖父は傘を差しており、カーブを曲がってやってくる電車の姿が見えなかったのだろう。耳も少し悪かったようだ。僕はなぜか祖父が死んだのは台風の夜中で、檀家を訪れた帰り道でたぶん少し酒も入っていたというように記憶していたのだが、当時の新聞記事を調べてみると、話はまったく違っている。「猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」「文藝春秋」2019年6月 文藝春秋)

私が、久しく知りたいと思っていた人物の名が、突然判明したときの驚きは、一種名状しがたいものがあります。なぜならそれは、予想どおり、いやそれ以上の内容だったからに他なりません。

## V

先述した「こうした彼の集中力は、父方の祖父ゆずりで、この祖父は、京都の寺の僧侶だった。その熱をおびた晴朗さは、いつまでも作家の心に刻まれている。」という一文に接して以来、私はある思いに取り憑かれています。それは当初、単なる思いつきに過ぎませんでしたが、次第にある種の確信に変化していました。しかし、それを証明するものは何もなかったのです。だからこそ、春樹の証言を頼りにして、なんとか祖父の名を知りたかったのです。

結論から申しますと春樹のデビュー作『風の歌を聴け』において、彼はデレク・ハートフィールドなる架空のアメリカ人作家を捏造しましたが、そのモデルは祖父「弁識」氏だったのではないのでしょうか?なぜなら、決定的であるのは「弁識」の「識」は、たとえば日本国語大辞典第五卷(1980年6月 小学館)の「①物事を見分ける。知る。さとる。／意識、知識(略) ②仏教で五蘊の一つ。認識する心の作用。／意識(略) ③かながえ。いけん。／識達(略) ④知り合い。／相識(略) ⑤しるし。しるす。／標識」等々の記述を一々引用するまでもなく、「心」ないしは「心の動き、あるいはそれに伴う作用全般」を現すという意味であり、つまり「ハート」だからなのです。それだけで十分かと思われます。あるいは孫の目には文字どおり「弁が立つ」風に見えた祖父の姿は、ハートフィールドの「文章を武器として闘うことができる」作家として描かれたのかもしれませんが。あるいは、傘をさしてエンパイアステートビルから飛び降りたというのは、傘をさしていて電車が近づくのがわからなかった祖父の最後の姿の再現かもしれません。

弁識氏は1958年8月25日に亡くなっていますが、そのとき70歳でした。とすると生年は1888年ということになります。思い出していただきたい。デビュー作『風の歌を聴け』が「1970年の8月8

日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る。」(「2」風の歌を聴け』『群像』1979年6月講談社)と記されていることを。かつて、加藤典洋氏が『村上春樹 イエローページ』(1996年10月荒地出版社)等で、物語が開幕直後にこのように明言されながら、実際は18日間に収まり切らぬと主張されましたが、春樹にとって重要だったのは、「1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る。(傍点引用者)」において、その中身ではなくて数字の方にあつたのです。それはまるで、語り手の「僕」が人間の存在理由をテーマにした短い小説を書こうとした結果、1969年8月15日から翌年の4月3日までの間に、358回の講義に出席し、54回のセックスを行い、6921本の煙草を吸ったことを記録していた姿をも彷彿とさせはしないでしょうか？

さらに、春樹の祖父であった弁識氏の命日が8月25日であり、それが『ノルウェイの森』の直子の命日と重複しているのは、(いや、作品を詳細に読めば、レイコさんからの手紙の中では直子の本当の命日はおそらく日付が26日になってからでしょうが、)一方で長年抱き続けていた私のもう一つの疑問を氷解させました。念のために申しますが、今ここで重要なのは、直子という名の方なのである。

考えてみれば、日本近代文学において男性作家たちの多くは母性思慕を描いてきました。泉鏡花然り、谷崎潤一郎然りです。しかし、ほとんど例外的に志賀直哉だけが(必ずしも「だけ」とは断言できないが)、父との不和を生涯のテーマとして取り上げていたように思われます。

だからこそ、村上春樹がデビュー作『風の歌を聴け』から描き、その後、間断なく『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』『螢』とその発展形である『ノルウェイの森』において、いわばその死を重ねていく存在は「直子」でなければならなかったのです。

なぜなら、志賀直哉の代表作にして、唯一の長篇『暗夜行路』の主人公時任謙作の妻の名は、他ならぬ「直子」だったからです。

と、ここまで書いてきて、あるいはこれもまた村上春樹という作家がわれわれに仕掛けた<sup>トラップ</sup>陥穽ではないかという気がしてきました。

最後に一つだけ確実に言えることがあります。それは京都の東山界限は春樹にとって、<sup>ハートフィールド</sup>心のふるさとだったのではあるまいかということです。

【付記】 今回の講演会の直後、京都在住の卒業生、島時代生氏から写真とともに耳寄りな情報が寄せられました。

島氏によれば、村上春樹の祖父村上弁識氏が住職を務めた青龍山安養寺参道の入り口に建立された石碑に、「住職 村上辨識」と記されているというのです。

私にとってこれは重大な意味をもちます。なぜなら、先の講演では「弁識」氏が「ハートフィールド」のモデルである挙証を「識」という文字にだけ求めたのですが、それは「弁」が新字体であるではなく、となると「辨」「瓣」「辯」のどれかであるわけで、それによってかなり意味が変わってしまうからでした。

今回、奇しくも島氏からもたらされた写真によってそれが「辨」だということが判明したのです。つまり、「弁」が「辨」の略字だということは、「わかる」「わかつ」「わきまえる」という意味であつて、まさに「こころ(ハート)」の作用そのものだということになると思われます。

この場を借りて、島時代生氏の情報提供に感謝いたします。

さらに、本講演録はすでに発表した「デレク・ハートフィールド考」(「京都話文」第27号 2019年11月 佛教大学国語国文学会)と論旨が同じであることをお断り致しておきます。





